



図 痤瘡瘢痕

遷延性紅斑に一致して複数の rolling scar が形成されかけている状況の患者 (a) に、BPO 製剤の外用を 4 カ月継続的に行ったところ (b)、ニキビ痕の形成を抑制できたと考えられる。

ニキビ痕制圧の予感

須賀 康

順天堂大学医学部附属浦安病院皮膚科学教室教授

先走りの感もあるが、5月21日はニキビの日。「いつも(5)ニキビ(2)は皮膚科(1)へ」の語呂合わせで、ニキビは皮膚科で治療できることを啓発するため制定されたと聞く。ニキビといえば新型コロナウイルス感染予防のためのマスク着用で誘発されるニキビの患者もすっかりお馴染みになった。

周知のごとく、ニキビを早期に治す必要があるのは、その後にニキビ痕が形成されるからであり、化粧でも隠せない瘢痕はメンタルにも多大な影響を及ぼすことが知られている。その治療としては外科処置や強力なピーリング、フラクショナルレーザーなどが知られているが、1回だけでは奏効せず、かといって十分な効果を期待して強力な治療を行うと、かえって色素沈着や瘢痕を悪化させる副作用もあるので、治療には十分な経験が必要とする。

Tanらの報告(J Drugs Dermatol 16:567, 2017)によると、ニキビ痕は、実は面皰・膿疱から直接進展するものは少なく(1%)、紅色丘疹から16%。もっとも多いのは紅色丘疹から遷延性紅斑と呼ばれるニキビ後紅斑を経て瘢痕に至る場合であり、82%であった。すなわち、膿疱化するよりも、炎症が局所に遷延して長期間にわたればニキビ痕を生じやすく、近年ではこれらの炎症は毛包漏斗部のアクネ桿菌に対するトール様受容体(TLR2)を介した自然免疫が関与すると考えられている。これ

により毛包周囲では転写因子AP-1を介したマトリックスメタロプロテアーゼの活性化も生じるため、毛包部に一致した真皮細胞外マトリックスの分解と変性によりニキビ痕が形成される。

本邦は幸いにもアダパレン、過酸化ベンゾイル、その合剤も医療保険でカバーされる国である。とくに合剤については顔面の左右片側ずつの randomized controlled trialでニキビ痕のリスクが有意に軽減され、重症度の改善もみられる。自然免疫に関与するIL-8やTRL2の発現も低下させるため、ニキビ痕形成の抑制も期待できる。

当院の症例においても、ニキビの遷延性紅斑に一致して複数のrolling scarが形成されかけている状況の患者に、早期より適切な外用指導を継続的に行ったところ、ニキビ痕の形成を抑制できた症例も複数経験している。

このようにニキビ痕が形成されそうな前段階での治療・予防にわれわれ皮膚科医が真剣に取り組んでいけば、近い将来には「いまの若者にはニキビ痕をみることが少なくなったよね」という会話が聞かれるようになるかもしれない。最近でもすでにニキビ痕制圧の予感として、来院する患者にニキビ痕が減っているようにも思えるが、もっともこれは私の視力が老化で以前より弱くなってきているからなのかもしれない。